

J による多倍長実数演算

慶応義塾大学理工学部

竹内寿一郎

1. はじめに

今年のはじめに「Jでパズルを」というシリーズをスタートした。その第1回目に「循環N倍数の問題」を取り上げた。これは「最後尾の数字を先頭にもってゆくと元の数のN倍になる数を求めよ」という問題であった。2倍のときの正解は18桁の循環数、すなわち繰り返すことにより、18 36 54 桁の数値が解となる。3倍のときは28桁、4倍では6桁、5倍では42桁、6倍では58桁の循環数などなど、これらの結果を確かめるには多倍長整数演算を行わなければならない。従来多倍長計算のソフトとしてUBASICなどが知られているが、多機能をもつJ言語で多倍長整数演算ソフトが容易に作成できるであろうと思った。そこで取り組んだのが第2回目の「多倍長整数演算」である。

ところが多倍長整数の表示を何桁でも表示できるようにベクトル(リスト)としたため、負の数の表示にアンダーラインを用いねばならず、ベクトルの要素として無限大という奇妙な表記法をとらねばならなかった。例えばマイナス20は_ 2 0 と表わさざるを得なかった。また、実際に演算用の動詞をつくって計算させると100桁程度の掛け算で数秒を要し、スピードの面からも数値計算に耐えうる演算システムとは言えなかった。さらにこれらを実数に拡張することを考えるとどのように実数を表示するかに困り果ててしまった。ベクトルの中間にピリオド(小数点)が使えないからである。

そんなとき、志村氏から多倍長の整数演算がJで出来るというお話を聞いた。多数桁の整数の後ろにxを付与すると多倍長演算をしてくれるというのである。そこで試しに実行すると確かに多倍長の演算をしてくれることが分かった。これを利用すれば演算時間を飛躍的に短くすることが出来ることを期待して、整数のみならず、実数の多倍長演算に拡張することを試みた。

2. Jの整数演算について

始めはまさかと思っていたのだが、いつの頃からできるようになったのか、JのフリーウェアであるJFW 3.0で実行してみた。

```

1x+6x
7x
1234567890123456789012345x+12345678901234567890x
1234580235802358023580235x
1234567890123456789x*1234567890123456789x
1524157875323883675019051998750190521x
循環6倍数では58桁の数値を6倍して、
1355932203389830508474576271186440677966101694915254237288x*6x
8135593220338983050847457627118644067796610169491525423728x

```

となり、確かに6倍すると桁がずれていることがわかる。

```

5x%7x
|domain error
| 5x %7x

```

144x%12x

12x

割り算は割り切れないとエラーとなり、割り切れる場合には割り算を行う。

ところで、最近のバージョンでは多倍長整数演算結果が異なることが分かった。ここでは同じフリーウェアになったJ405dを使って試してみる。

1x+6x

7

実行結果は、後ろに x が付いていない。

1234567890123456789012345x+12345678901234567890x

1234580235802358023580235

1234567890123456789x*1234567890123456789x

1524157875323883675019051998750190521

循環 6 倍数では、

1355932203389830508474576271186440677966101694915254237288x*6x

8135593220338983050847457627118644067796610169491525423728

となり、後ろに x が付かない。

5x%7x

5r7

割り切れない場合には有理数 (分数) 表示になる。

1068876381177246918505448039907942x%10821521025816186345584514444x

8657898765456789r87654321098

有理数表示では有り難いことに適当に約分してくれる。

144x%12x

12

割り切れる場合は割り算を実行してくれる。

最近のバージョンでは多倍長整数演算の実行結果の後ろには x が付かないことに注意しなければならない。そこで少し多倍長整数演算の性質を調べてみる。

1543456778990887666677788999988+887655432344567778876656667

1.54434e30

いくら長くても後ろに x が付いていなければ多倍長演算をしてくれない。

123456789876543234566778898998765+1234567890123456789x*1234567890123456789x

1.52428e36

後ろに x がついていない整数があると、このように精度がおちてしまう。

z=.1234567890123456789x*1234567890123456789x

z

1524157875323883675019051998750190521

z に代入しておけば多倍長で記憶しておいてくれる。

z+1234567890123456789x*1234567890123456789x

3048315750647767350038103997500381042

z を使って多倍長計算をすることができる。

z

1524157875323883675019051998750190521

```
zz=".":z
```

```
zz
```

```
1.52416e36
```

上のように、一度文字に直して再び数値に変えると精度が落ちてしまう。

```
zz=".(" :z), 'x'
```

```
zz
```

```
1524157875323883675019051998750190521
```

文字化したら必ず後ろに x を付けて数値化しなければ多倍長整数にならない。

以上のことから鑑みてここでの多倍長実数演算用の動詞は処理系に依存するので、フリーウェアである J405d 上で作成することにした。

3 . 実数の表示について

J の多倍長計算はあくまでも整数の演算のみなので、実数つまり小数点表示は使えない。そこで実数を指数部と仮数部に分けて表示するいわゆる、浮動少数点方式の表示を採用することにした。

例えば次の割り算の結果を考える。

```
796456876x%576457x
```

```
796456876r576457
```

という有理数表示になってしまう。そこでこれを割り切れるように工夫する。

適当に被除数に 10 のべき乗を掛けて、剰余を引き、割り算をすると

```
((796456876*10x^20)-576457x|796456876x*10x^20)%576457x
```

```
138164143379298022228891
```

という答えになる。真の解は、

```
796456876%576457
```

```
1381.64
```

そこでこれを指数部と仮数部で表示すると、

```
4 138164143379298022228891つまり 0.13816414337929802222889110^4
```

と書くことになる。

ところが 4 138164143379298022228891 は 1 つの数値がベクトル (リスト) になる。

これでは後々大変でもあるし本来、実数 1 つはスカラ (アトム) であるべきなので、

```
+-----+
```

```
|4 138164143379298022228891x|
```

```
+-----+
```

と表示することにする。そのための動詞 su を用意した。

```
su=:<@(&,&'x')@":
```

これに付随して符号を調べる sign、符号変換 minus 絶対値 abs などの動詞も用意した。

```
sign=:[:*[:{[:[".:>]
```

```
minus=:3 : 0
```

```
<(" :qq), ' ', (" :-yy), 'x' [ ('qq' ; 'yy') =: " .>y.
```

```
)
```

```
abs=:3 : 0
```

```
<(" :qq), ' ', (" |yy), 'x' [ ('qq' ; 'yy') =: " .>y.
```

```
)
```

使用例 :

```
a=.su 4 138164143379298022228891x
a
+-----+
|4 138164143379298022228891x|
+-----+
  b=.minus a
  b
+-----+
|4 _138164143379298022228891x|
+-----+
  abs b
+-----+
|4 138164143379298022228891x|
+-----+
  sign"0 a,b
1 _1
```

なお、桁数が10桁より多いときは末尾に必ずxをつけねばならない。

```
su 3 123456789123456789123456789
+-----+
|3 1.23457e26x|
+-----+
  su 3 123456789123456789123456789x
+-----+
|3 123456789123456789123456789x|
+-----+
```

4 . 割り算について

割り算の動詞divは単項で逆数、2項で商が計算できるようにしてある。この動詞を作成するにあたっての留意点は、仮数部は被除数を適当に10の冪乗倍して除数を引き割り切れる数にすること、指数部は両引数の指数部の引き算で良いが被除数と除数の比が1以上のとき1を加えねばならないことにある。特に1以上という条件が厄介で、ちょうど1であることを判定するには全ての桁を比較しなければならないからである。逆数についてもしかりで、例えば、ちょうど1のとき、その逆数の仮数部は1となるが、指数部は自動的に計算させるとマイナス1になる。そのためそれに1を加え(仮数部の先頭に小数点があるとしているので、すでに10で割った表現となっているから)、さらにちょうど1であるから1を加え、_1+1+1で、結果は1ということにする。逆数の中でちょうど1であると判定している部分は、if.*/('1'={.:y}, '0'={}).である。2項動詞の割り算では除数と被除数の大小を比較し、大きくもなく、小さくもないときに、等しいかどうかの判定をすることになっている。

```
div=:3 : 0
n=: $" : |y[ 'p y'=: ".>y.
if.*/( '1'={.:y}, '0'={}).":y do.r=:1 else. r=:0 end.
```

```

zz=: $" : z=: (x0-y | x0=.10x^NN+n-r)%y
<(" : r+>:-p), ' ', (" : z), 'x'
:
m=: $xx=: " : |x[ 'q x'=: ".>x.[n=: $yy=: " : |y[ 'p y'=: ".>y.
if. xx<&([" : (<./m,n)&{.)yy do. r=:0
elseif. xx>&([" : (<./m,n)&{.)yy do. r=:1
elseif. (xx, ((>./0,n-m)#'0'), 'x')=&([" : (>:./m,n)&{.)yy, ((>./0,m-n)#'0'), 'x' do.
elseif. '' do. r=:0
end.
zz=: $" : z=: (x0-y | x0=.x*10x^NN+1-m-n-r)%y
<(" : r+q-p), ' ', (" : z), 'x'
)

```

使用例 :

```

NN=:30
a=:su 1 _52345654329087111111x
b=:su _1 52345654329087657689x
a
+-----+
|1 _52345654329087111111x|
+-----+
b
+-----+
|_1 52345654329087657689x|
+-----+
div a
+-----+
|0 _1910378259316793281676749675621x|
+-----+
b div a
+-----+
|_2 _100000000000000104417072822085424x|
+-----+

```

5 . 足し算、引き算について

最も苦労したのが和と差の演算である。乗除算においては桁数はいい加減であっても多くとってあれば実害はない。しかし加減算では実数を整数に直すとき、1桁でも間違えると命取りになる。指数部をそろえると多くの場合桁数の異なる整数となるので、当然はじめに指定した精度 NN より多い桁数で加減算を行うことになる。

和の場合では桁上がりが生じた場合、指数部に 1 を加えねばならないが、これは結果の桁数が元の両引数のうちの最大桁を超えたかどうかで判定される。差の場合は桁落ちが生じたとき、不足分に対して後にゼロを付加した結果を出すようにしている。和と差は 1 つの動詞でつくることが出来るが、高速演算をもくろむためには、少々無駄ではあるが、分けて処理した方が良くと

判断した。なお、waは正の符号をもつ引数同士の和、saは左引数の方が大きい場合の正の符号をもつ引数間の差をとる動詞、add と sub は正負の符号を決めるための動詞である。

```

wa=:4 : 0
m=: $xx=: " |x[('p' ; 'x')=: ".>x.[n=: $yy=: " |y[('q' ; 'y')=: ".>y.
if. 0<p-q do. x0=:xx,(((p-q)+>:NN-m)#'0'), 'x'[y0=: [yy,((>:NN-n)#'0'), 'x'
else. x0=:xx,((>:NN-m)#'0'), 'x'[y0=:yy,(((q-p)+>:NN-n)#'0'), 'x' end.
<(":((>./(<:$y0),<:$x0)~:$Z)+>./p,q), ' ',(NN{.Z=:(" .x0)+" .y0), 'x'
)
sa=:4 : 0
m=: $xx=: " |x[('p' ; 'x')=: ".>x.[n=: $yy=: " |y[('q' ; 'y')=: ".>y.
if. 0<p-q do. x0=:xx,(((p-q)+>:NN-m)#'0'), 'x'[y0=: [yy,((>:NN-n)#'0'), 'x'
else. x0=:xx,((>:NN-m)#'0'), 'x'[y0=:yy,(((q-p)+>:NN-n)#'0'), 'x' end.
ZZ=:<./ (MN=:>./($x0),$y0),$Z=:(" .x0)-" .y0
<(":(>./p,q)-<:MN-ZZ), ' ',(NN{.Z,(MN-ZZ)#'0'), 'x'
)
add=:4 : 0
if. (x. *&sign y.)=1 do.
if. 1=sign x.do.x. wa y.else.minus x. wa y.end.
else.
if.(val abs x.)>val abs y.
do.z=:x. sa y.
if.1=sign y.do.z=:minus z end.
else. z=:y. sa x.
if.1=sign x.do.z=:minus z end.
end.end.
)
sub=:4 : 0
if. (x. *&sign y.)=_1 do.
if. 1=sign x.do.x. wa y.else.minus x. wa y.end.
else.
if.(val abs x.)>val abs y.
do.z=:x. sa y.
if._1=sign x.do.z=:minus z end.
else. z=:y. sa x.
if._1=sign y.do.z=:minus z end.
end.end.
)

```

使用例 :

```

a
+-----+
|1 _52345654329087111111x|
+-----+
b

```

```

+-----+
|_1 52345654329087657689x|
+-----+
    a add b
+-----+
|1 _518221977857962345341100000000x|
+-----+
    a sub b
+-----+
|1 _528691108723779876878900000000x|
+-----+
    b sub a
+-----+
|1 528691108723779876878900000000x|
+-----+
    c
+-----+
|1 _52345654329087657689x|
+-----+
    a add c
+-----+
|_13 _54657800000000000000000000000000x|
+-----+

```

次の val はボックスで囲まれた実数を単精度の数値に変える動詞である。

```

val=:3 : 0
(( *s) * " . ' 0 . ' , " : | s = . { : u ) * 10 x ^ { . ( u = . " . > y . )
)
(val a) + val c
_5.41789e_14
9087111111x - 9087657689x
_546578

```

6 . 掛け算について

積の動詞の作成にあたっては次のことだけ気を付ければ良い。m 桁と n 桁の整数の掛け算は桁上がりがないければ $m+n-1$ 桁になり、それを越えたときは桁上がりが生じているとして指数部を調整する。また精度不足の数値に対しては後にゼロと x を付与して目標の精度をもつ数に直す。

seki は正の引数同士の積を定義して動詞、mult は符号も考慮した積の動詞である。

```

seki=:4 : 0
m=: $xx=: " : | x [ ( ' p ' ; ' x ' ) =: " . > x . [ n =: $yy=: " : | y [ ( ' q ' ; ' y ' ) =: " . > y .
MN=: $ " : Z=: ( | x ) * | y
< ( " : p + q - ( MN < m + n ) ) , ' ' , ( NN { . ( " : Z ) , ( ( > . / 0 , > : NN - m + n ) # ' 0 ' ) ) , ' x '
)
mult=:4 : 0

```

```
if. (x. *&sign y.)=1 do.x. seki y.else.minus x. seki y.end.
)
```

使用例：

```

a
+-----+
|1 _52345654329087111111x|
+-----+
b
+-----+
|_1 52345654329087657689x|
+-----+
a mult b
+-----+
|0 _274006752714030482743330177115x|
+-----+
(a mult b)div a
+-----+
|_1 523456543290876576889999999983x|
+-----+

```

7 . 総合応用例

また、応用上必要と思われるこの演算システムでの動詞をいくつか定義しておく。

```

iotal=:3 : 0
,"1&'0x'each z=:su0 "0 >:i.y.
)
su0=:3 : 0
<(":#":y.),' ',":y.
)
fact=:3 : 0
mult/iotal y.
)

```

応用例：

```

NN=:30
su0 8
+----+
|1 8|
+----+
iotal 8
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
|1 10x|1 20x|1 30x|1 40x|1 50x|1 60x|1 70x|1 80x|
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+

```



```

fact 8
+-----+
|5 403200000000000000000000000000000000x|
+-----+
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.8
+-----+
|1 271827876984126984126984126984x|
+-----+
  "!.16+/1,%!>:i.8
2.71827876984127
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.20
+-----+
|1 271828182845904523533978449066x|
+-----+
  "!.16+/1,%!>:i.20
2.718281828459045
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.30
+-----+
|1 271828182845904523536028747135x|
+-----+
  "!.20+/1,%!>:i.30
2.7182818284590451
  NN=:50
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.30
+-----+
|1 27182818284590452353602874713526623722257021309834x|
+-----+
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.40
+-----+
|1 27182818284590452353602874713526624977572470936999x|
+-----+
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.50
+-----+
|1 27182818284590452353602874713526624977572470936999x|
+-----+
  NN=:80
  add/(su 1 100),div"0 fact"0 >:i.100
+-----+
|1 2718281828459045235360287471352662497757247093699959574966967627724076630353
+-----+

```